

ったので、神名を口にして呼び寄せたのだろう。対象とする神は天地神(七例)、海神(二例)、鹿島神(一例)であるが、神が何処に坐すかは漠然としてることが多い。万葉集に「天地の神乎祈りて」(巻二〇・四三七四)等があり、宣命第十三詔(七四九年)にも「天坐神地坐神乎祈禱奉」とある。これらは、いずれも動作の対象を示す格助詞「を」が「神」に下接しており、神の坐す場所は問題視されていない。一方、動作の帰着点を示す助詞「に」が下接する「神に祈る」という表現は、「哭澤の神社爾神酒据多禱祈れども」(巻二・二〇二)や「住吉の我が皇神爾幣奉り祈り」(巻二〇・四四〇八)等の如く、「神」という語と「祈る」という動作を表す語と共に供物に関する語句や時には神下ろしの装置を表す語句が併記されていて、神が何処に坐すと考えているかが明らかでない場合である。また、宣命第三十四詔(七六五年)「己先靈仁祈願ヘル」は祖霊に対する場合だが、祈る対象は霊牌であろうし、それは祈る者の眼前に存する。つまり、「神を祈る」では動作(祈り)の対象だった神が、祠や社に迎えられると口に出して呼ぶ必要がなくなり、関心の中心が祈りの内容(願い事)に移った。その結果、「神に(〜を)祈る」という形で、神に様々な願い(祈願)をする意味になったのではないか。延喜式祝詞に類出する「某と御名は白して辞竟へ奉る」(祈年・月次)は、「神を祈る」の延長線上にある表現だと考えられる。

四、その他。今日「某に問ふ」というところを、上代では「某を問ふ」と言った例が履中記歌謡を初め訓点資料や皇太神宮儀式帳に見られる(春日政治、西宮一民説)。「御舎乎仕奉」(祈

年祭祀詞)の例もある。また、「神祇令」は、中国とは全く伝統を異にする神祇信仰を唐の「祠令」に基づいて整理したものと言われるが、「祠令」に存する祭祀の場所の規定が「神祇令」にはない。これらのことを併せ考える必要がある。

相嘗祭の一考察

富田 実

相嘗祭は、新穀を神様に捧げて祭ることであり、それは収穫物を得るべきに相応しい土地と共同生活を営むのに相応しい居住地にある所の特定諸社の神様に、新穀を供薦し祀る祭儀であると考える。近頃、約二四〇〇年前の水田跡の土を使った稲の生育実験の結果、現代の水田で育てた稲の高さは均一であるが、古代の水田は、場所毎に差が生じ、米の収穫量にも違いがあったのではないかと研究結果が出ている。又、農地の土には、多くの水も必要ではあるが、土には養分補給の施肥と土の働きを担っている多くの微生物も存在し、「土づくり」に貢献して生産性を維持している。勿論、自然としての恵みを受けるだけでなく、耕作者が土に働きかけ手を入れ、良い土壌にする環境を作っていく訳である。相嘗祭は、天武天皇のご遺志を継がれた持統天皇が、天神地祇を祭られ、幣帛を諸神祇に頒たれたこと、又、奈良盆地の農耕に關しての祭祀、つまり、自然の災害から守り稲作の豊穰を祈る祭祀を、定例化された上で国家体制の一層の確立を計られた。稲作に、直接携わる国民に、耕作地域の農耕の収穫感謝の祭祀を齎行することで、豪族や国民に、安寧の願いの心を知らしめ、国家財政である稲作拡大の重

要性と地域固有の産物の収穫の大切さを、特定の神社を通じて示され、祭政一致をあらゆる形で実現せられたのではないかと考えられる。又、相嘗祭の奉幣に預る社は国家成立以前より人智の及ばぬ現象に対する畏怖を払拭し、大きな神の恵みの働きにより毎年、くり返し同じ場所で、定期的に一定量の穀物等の収穫を得るため、毎年くり返し神様に祈り祭る新穀感謝祭、つまり相嘗祭を斎行していた。その祭祀実績に基づき、国家の繁栄を祭祀で深く規定し、統一国家の体質を強化することが、相嘗祭の成立の要因と考える。相嘗祭の祭典執行者は、各社の神主であり、その祭祀に奉られる幣帛は、神祇官から受領されていた祭祀に際して七十一座の神々に奉献する処の幣物は、各々神社から神祇官を通じて、太政官に事前に申出て請い受ける事、又、酒料の稲も同じく申請してその料は、神税および正税から用いられていた。幣帛の品目種類は布帛類、海産物、筥、祭器、酒稻の五種類に分類することができ、特に祭器は神酒の醸造や供薦の用具や容器として、各社に奉献されたものと理解できる。その数量は社によって其々異なり、品目にも若干の差異は認められる。そして、相嘗祭の幣物は、自ら耕す神田からの収穫物を奉献し、神様に新嘗聞食して頂く祭祀が、相嘗祭という事であったので、酒料の稲は、神社の管理する神田からの新穀を用い醸造した御酒が重要な意味をもっていた。その理由は、人々は、米や野菜の生産を守って戴ける神様に、まず収穫物を捧げた。それらは、生活する自分の住む土地で採れた物を、産土神に奉献した食物を食べると、健康で長生きできるという教訓が出来上がっていたからである。神様は自然と共にあ

って森羅万象そのものが神様のお姿であり、穀物は人の力だけによって育つものではなく、農耕と云う共同作業の人々の願いが稔となって顕現される。その共同体の発達は、氏神の祭祀を導きだす。人と土は一体であつて人の命と健康は食べ物で支えられ、食べ物も土が育てる。故に、人の命と健康はその土と共にあるという捉え方が根底にあり、相嘗祭幣物の酒稻料は神税及び正税から用いられたのであろうと考える。五穀の豊穰は、国民の生活の安定に欠かせぬ願いであり、それは、自分たちの土地で摂れる収穫物で生命の源を養っているという自覚があつた。相嘗祭の官幣に預かつた神社は、奈良盆地に大和国となる以前から、新穀感謝の祭祀として、信仰されていた神社であると考えられ、平安時代に入り新たに京中・山城国等の神祇が増加されていったと考える。

近世期における西京神人と御供所

—— 祭礼および営繕活動について ——

吉野 亨

京都府北野天満宮で十月一日から五日にかけて行われる瑞饋ずいき祭まつりでは、瑞饋神輿と呼ばれる神輿の形状をした神饌が、中京区西ノ京にある御旅所から北野天満宮周辺を廻る。この祭りの由来について『北野誌』『瑞饋神輿略記』では、北野天満宮に奉仕していた西京神人が奉仕の余暇に営んでいた農業で収穫した作物をお供えした祭りであるとされる。現在のように瑞饋神輿を掻き回る形になったのは、慶長十二年(一六〇七)とされ、祭りに供えていた神饌が次第に大型化し、最終的に神輿型に供